

目 次

第1章 保育と心理学	3
《第1節 「保育の心理学」を学ぶ目的》	3
《第2節 子どもの発達理解》	3
《第3節 発達を規定する要因》	5
《第4節 人との相互的関わりと子どもの発達》	6
第2章 生涯発達と初期経験の重要性	7
《第1節 生涯発達と発達援助》	7
《第2節 初期経験の重要性》	12
第3章 発達期の特徴	17
《第1節 胎児期及び新生児期の発達》	17
《第2節 乳幼児期の発達》	20
《第3節 学童期及び青年期の発達》	29
《第4節 成人期及び老年期の発達》	32
第4章 生活や遊びを通じた学びの過程	34
《第1節 子どもの生活や遊びと学び》	34
《第2節 生涯にわたる生きる力の基礎を培う》	35
第5章 保育における発達援助	37
《第1節 子どもの発達と保育実践》	37
《第2節 発達の課題に応じた関わりと援助》	39
《第3節 子どもの精神保健上の問題》	41
《第4節 保育所保育指針 第2章 子どもの発達》	46

※ 各四角の枠内の同じ記号(A、B、C・・・)の()には、同じ語句が入ります。

第1章 保育と心理学

《第1節 「保育の心理学」を学ぶ目的》

1	「保育の心理学」を学ぶ目的は、保育との関連で子どもの（ A ）の過程や（ B ）の過程を理解し、子どもの心身の状態や行動等を把握する技術を高め、子ども理解に基づき適切な（ A ）援助を行うことにある。	□ □ □
2	（ A ）によると、専門家には、学問の理論や知識を実践にあてはめて効率よく合理的に反復して行動する「技術的熟達者」と、不確定な状況の中で思考しながら判断し、実践の中で自分の理論からみて振り返りを行う「（ B ）」の2つのタイプがある。保育者は一定の技能を身につけている必要があることから「技術的熟達者」であると同時に、複雑な状況を判断しながら保育を行うことから「（ B ）」でもある。	□ □ □

《第2節 子どもの発達理解》

1	一般的に、身体が形態的に大きくなることを（ A ）といい、精神面および運動面での機能的成熟のことを（ B ）という。	□ □ □
2	保育所保育指針 第2章 冒頭（抜粋） 子どもの発達は、子どもがそれまでの体験を基にして、（ A ）に働きかけ、（ A ）との（ B ）を通して、豊かな（ C ）、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得していく過程である。	□ □ □
3	【発達の原理】 発達の（ A ）性： 発達は飛躍的に起こるのではなく、（ A ）的、漸進的に起こる。 発達の順序性： 発達は一定の順序で起こる。 発達の（ B ）性： 発達は一定の（ B ）性をもつ（頭部から尾部、中心部から周辺部、未分化な全体的運動から分化した個々の運動へ）。 発達の（ C ）： 発達には一定の（ C ）がある。 発達の（ D ）性： 発達には（ D ）性がある（第1反抗期と第2反抗期の現象など）。 発達の（ E ）： 発達には（ E ）がある。	□ □ □

4	<p>Bronfenbrenner (Bronfenbrenner, U.) は、発達しつつある子どもは「入れ子構造」になった (A) システムの中にはめ込まれていると述べ、発達の (A) を5つのシステムに分類した。(A) システムは、子どもを中心に考えたとき、子どものごく身近な環境である (B) システムを中心とした「入れ子構造」をもち、相互作用的に働くとしている。</p>	□ □ □										
5	<p>【Bronfenbrennerの (A) システム】</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%;">(B) システム</td> <td>身近な行動場面における活動、役割、対人関係のパターン (自分と親・きょうだい・保育所との関係など)。</td> </tr> <tr> <td>(C) システム</td> <td>個人が属している2つ以上の行動場面の相互関係 (家庭と保育所との関係、家庭と学校との関係など)。</td> </tr> <tr> <td>(D) システム</td> <td>個人が直接的、能動的に参加してはいないが、その個人が属する (B) システムに影響を及ぼす可能性がある行動場面 (両親の職場、兄弟の学校、両親の友人関係など)。</td> </tr> <tr> <td>(E) システム</td> <td>文化全体のレベルで存在しているシステムであり、各システムの内容や形態に一貫性を与え、その基底をなすもの (歴史的な出来事、価値観、文化、言語、イデオロギー、法律、習慣など)。</td> </tr> <tr> <td>(F) システム</td> <td>時間軸、世代間の問題に関わるシステム。</td> </tr> </table>	(B) システム	身近な行動場面における活動、役割、対人関係のパターン (自分と親・きょうだい・保育所との関係など)。	(C) システム	個人が属している2つ以上の行動場面の相互関係 (家庭と保育所との関係、家庭と学校との関係など)。	(D) システム	個人が直接的、能動的に参加してはいないが、その個人が属する (B) システムに影響を及ぼす可能性がある行動場面 (両親の職場、兄弟の学校、両親の友人関係など)。	(E) システム	文化全体のレベルで存在しているシステムであり、各システムの内容や形態に一貫性を与え、その基底をなすもの (歴史的な出来事、価値観、文化、言語、イデオロギー、法律、習慣など)。	(F) システム	時間軸、世代間の問題に関わるシステム。	□ □ □
(B) システム	身近な行動場面における活動、役割、対人関係のパターン (自分と親・きょうだい・保育所との関係など)。											
(C) システム	個人が属している2つ以上の行動場面の相互関係 (家庭と保育所との関係、家庭と学校との関係など)。											
(D) システム	個人が直接的、能動的に参加してはいないが、その個人が属する (B) システムに影響を及ぼす可能性がある行動場面 (両親の職場、兄弟の学校、両親の友人関係など)。											
(E) システム	文化全体のレベルで存在しているシステムであり、各システムの内容や形態に一貫性を与え、その基底をなすもの (歴史的な出来事、価値観、文化、言語、イデオロギー、法律、習慣など)。											
(F) システム	時間軸、世代間の問題に関わるシステム。											
6	<p>かつては、地域で子どもたちの世話をやくおじさん (おばさん) ((A)) が存在していたが、コミュニティの変化によって地域の大人の子どもへの関心は薄れ、子育ての習慣なども伝承されにくくなった。このような環境と人間関係の変化は、現代の子どもたちの発達に大きく関わっている。</p>	□ □ □										

7	<p>（ A ）とは、保育所や幼稚園に通い始めたり、小学校に入学したりなどの人生のイベントや、転居による移動、さらには災害や事故など予想外の出来事によって生じる、その人を取り巻く変化をさす。</p> <p>（ A ）は、不安や混乱をもたらす危機的状況ともなるが、一方で、今までとは別の見方ができるようになったり、新たな行動様式を獲得することができるようになるなど、プラスの側面も有する。</p> <p>きょうだいの誕生は、多くの子どもが経験する（ A ）である。子どもによっては、親の関心を奪われる不安から、指しゃぶりをしたり、ミルクを欲しがったりするなど、（ B ）とよばれる行動がみられることがある。</p>	□ □ □
---	--	-------

《第3節 発達を規定する要因》

1	<p>（ A ）の経験論によれば、子どもは（ B ）とよばれる白紙状態で生まれ、その後、成長とともに経験によって心の内容が書き込まれていき、性格や能力が形成される。</p>	□ □ □
2	<p>（ A ）は、人間の精神には生得的にさまざまな原理が備わっているという生得説を唱えた。</p>	□ □ □
3	<p>（ A ）とは、発達の基本的な様態と順序は環境によって変わることはなく、人が生まれながらにもつ遺伝的な素質や生物学的な要因が、一定の秩序で時間の経過に伴って自然に発現するとする考え方である。</p> <p>（ B ）は、（ A ）の立場に立ち、（ C ）説を掲げた。すなわち、（ B ）は、双生児統制法による階段登りの実験を行い、発達には早い時期からの訓練が必ずしも有効とはならず、（ D ）に到達する以前に訓練を行っても無意味であることを示した。</p>	□ □ □
4	<p>（ A ）とは、遺伝的要因をほとんど認めず、発達は社会的環境が要因となって生じるとする考え方である。</p> <p>（ B ）は、（ A ）の立場から（ C ）主義を主張し、環境からの受動的な学習が発達の規定要因になると考え、一貫したしつけ、習慣形成のための訓練の必要性を唱えた。</p>	□ □ □